

キリスト教におけるインクルージョン研究Ⅲ

ルカ神学における「貧しき者の理解」

すずき ふみ はる
鈴 木 文 治

〈要 旨〉

キリスト教におけるインクルージョン研究の第三弾として、ルカ神学の「貧しき者」を取り上げる。ルカは医師であり、ギリシャ人である。医師という客観的・科学的に対象を分析する視点があり、また、彼の生きた時代の重圧の中で人々の苦しみに直接手を触れる場面を多く体験した人物である。彼の語る福音書には、同じ出来事を記した共観福音書と比較すれば、ルカの視点の特徴が明確になっている。それは、事柄を何か精神主義的なものに解釈したり、時代的・政治的背景に配慮するような記述の傾向は少なく、事実を事実として捉えようとする意図が浮かび上がってくる。

ギリシャ人であること、すなわち異邦人としての視点からは、ローマ帝国の圧政に苦しむユダヤ人とは一步距離を置いた位置に立ち、政治的状況からの影響もあまり受けていない。このことが、事実を事実として把握する論調になっている。

最も分かりやすい例は、マタイとの比較である。マタイは、「心の貧しい者」と記すのに対して、ルカは端的に「貧しい者」と表している。これはマタイが単純な貧しさではなく、心の貧しさ、精神の貧しさに触れていることは、マタイの持つ精神化、内面化の傾向の強さと同時に、ローマ帝国の植民地であるユダヤの置かれている政治的な状況を念頭にした表現であることが理解できる。すなわち、ローマ帝国の植民地政策の最大の関心事は、ローマへの反逆、抵抗運動を封じ込めることにある。貧しい者それ自体がローマ帝国への反逆分子となりうる可能性を持った人々ということになる。そのまま貧しき者という表現は、ローマ帝国への潜在的反逆者を意図すると考えられる恐れがあり、「心の貧しき者」という精神主義的表現を用いざるを得なかったと考えられる。

ルカは自身が聞き取る事柄を直截に述べている。「貧しい者」、「今飢え渴いている者」、「今泣いている者」という、まさにルカの目の前にいる人々の「生の姿」を描くことによって、人間存在を描き出していて、臨在感のある言葉になっている。当然、彼らの前に立つキリストの言動も臨場感の迫る活き活きとした姿に描かれている。それが、ルカ神学の特徴である。

では、ルカはこのような「貧しい者」をどのような視点から描いているのか。それはユダヤ教の時代の貧しい者の理解とは、どう異なっているのか。さらに、今日のインクルージョンの観点から、ルカの描く「貧しい者」の理解を探るのが本論の趣旨である。

同時に、聖書における「貧しさ」の問題は、正に今日的世界的な課題となっていることを踏まえて、今日の「貧しさ」の意味と、その救済について触れてみたい。それは、論者が、現代の貧困の象徴であるであると考えられるホームレスの支援活動に、25年間関わってきたことと関係している。そこで知らされる現代の貧困の課題と、ルカ神学の貧困の課題との対比を試み、インクルージョンのあり方に迫りたい。

〈キーワード〉

貧しい者 プトーコス コイノニア 原始共産制 神の国 共生社会 インクルージョン

I. はじめに

「貧しい人々」と訳されているギリシャ語は、一般的には「ペネース(πενης)」である。だが、「貧しい人々は、幸いである(ルカ6章20節)」にある「貧しい人々」の原語は、「プトーコス(πτωχος)」である。ペネースは、人生と生活が戦いであり、豊かに暮らしている人の反対側にいる人々を指している。プトーコスは縮む、竦むという動詞から出た言葉であり、無一物の、本当に餓死をする危険が内在している貧乏を指している。すなわち「乞食」意味する言葉である。^(注1)

一般的に貧しさではなく、極貧の者、すなわち、乞食を指すものである。「乞食」の表現そのものが、現在では差別用語に抵触すると考えられて普通には使用されていないが、原語の意味するのは、無一物で他者に施しを乞うて生きている者である。この論文では、事柄を明確にするために、敢えて「乞食」の表現を使う。

乞食とは、極貧者のことである。障害の故に神殿の道ばたに置かれて物乞いをする人、仕事にありつけない日雇い労働者、逃亡奴隷、経済的理由から故郷を離れた人々、借金のために土地を失った小作人、神殿娼婦として糊口を凌がざるを得ない人などがこの「プトーコス」に分類され、経済的にも社会的にもどん底で生きる人たちのことである。

当然、このような人々に対する社会的な差別、蔑み、排除は、極めて厳しいものがあつた。ファリサイ派や律法学者、また裕福な支配階級の人々は、彼らを神の恵みから脱落した者として、神の国へ入ることの出来ない者と見ていた。

当時のユダヤ教の世界では、この世で起こる不幸なことは神の裁きとして考えられ、障害も神の裁きの結果とされていた。今日的な言い方であれば、「自己責任」ということになる。彼らを同情の目で見るとは薄い。

だが、この「乞食」に対するイエスの発言は、当時の支配階級の人々にも信じがたいものであつた。イエスの敵対者であつたファリサイ派、律法学者に対して、「徴税人や娼婦たちの方があなたたちより先に神の国に入るだろう。」と言ったのだから。ファリサイ派や律法学者は、ユダヤ教の教えを厳格に守り、自分たちこそ神の恵みを受けるべき者であり、神の国が約束されていることを信じ

て疑わなかった人たちであるからである。

社会の差別や排除を受けながら、どん底の生活を余儀なくされていた人々こそ、福音の対象であり、神の国への優先権を持つ者とされた。乞食や娼婦が「禍いである」と呼ばれている社会の中で、彼らこそ「幸いなり」と言った。この逆転は敵対者はおろか一般の人々にもには信じがたいものであった。イエスはさらに宣言する。「神の国は彼らのものである」と。神の国とは、乞食たちのものであると、告げたのである。

ユダヤ教や当時の社会的通念からすれば、これは信じがたい暴言であり、人間の持つ価値観の全面否定である。律法を厳守して、献金の掟も恙なく守り、当時の社会では尊敬の対象と見られていた人たちではなく、よりによって「乞食こそが幸いである」とされたのだから。ではなぜこのような逆転が起こったのか。

ルカはイエスの出来事を福音書に書き綴る。この世で排斥される者が福音の中心にいることを。神の国とはこの世で悲惨な生き方をした者たちに許されているところであることを。

この「ブトーコス」が福音書に示されているのは、全体で 11 例、ルカは 9 例である。

- ①乞食たちの祝福(ルカ伝 6 章 20 節, マタイ伝 5 章 3 節)
- ②金持ちと乞食ラザロ(ルカ伝 16 章 20 節, 22 節)
- ③乞食のやもめ(マタイ伝 12 章 42 節, 43 節, ルカ伝 21 章 3 節)
- ④金持ちと神の国(マルコ伝 10 章 21 節, マタイ伝 19 章 21 節, ルカ伝 18 章 22 節)
- ⑤香油を注ぐ女(マルコ伝 14 章 5 節, 7 節, マタイ伝 26 章 9 節, 11 節, ヨハネ伝 12 章 5 節, 6 節, 8 節)
- ⑥徴税人頭ザアカイ(ルカ伝 19 章 8 節)
- ⑦ユダの裏切り(ヨハネ伝 13 章 29 節)
- ⑧ヨハネとイエス(マタイ伝 11 章 5 節, ルカ伝 7 章 22 節)
- ⑨メシア宣言(ルカ伝 4 章 8 節)
- ⑩招待客の選び(ルカ伝 14 章 13 節)
- ⑪盛大な宴会の譬え(ルカ伝 14 章 21 節)^(注 2)

この事例の中から①②③⑨を取り上げて、「ブトーコス」についてのルカの理解を探りたい。

Ⅱ. 旧約聖書における「貧しき者」の理解

ルカ神学における貧しい者の理解に先立って、旧約・ユダヤ教の時代には、富や財産所有と貧しい者との関係をどのように捉えられていたかを探る。

預言者の説教やトーラー(社会的律法)の中では、財産批判に対する鋭い指摘が至るところに

散見される。同時に、社会的に弱い立場にある人々の保護が、財産所有の権利よりも上位に置かれていると見ることも出来る。

<貧しい者への圧制への糾弾>

最初の記述預言者アモスは、北イスラエル王国の裕福な大地主や政府高官による貧しい人々への圧制を、厳しく攻撃する。

彼らは門にいて戒める者を憎み
真実を語る者を忌みきらう。
あなたがたは貧しい者を踏みつけ
彼から麦の贈り物を取るゆえ
あなたがたは切り石の家を建てても
その中に住むことは出来ない。 (アモス書 5 章 10,11 節^(注3))

あなたがた、貧しい者を踏みつけ
また国の乏しい者を滅ぼす者よ
これを聞け。 (アモス書 8 章 4 節)

アモスの支配階層への厳しい批判は、イザヤによって南ユダ国でも継承された。

わざわいなるかな
不義の判決を下す者、暴虐の宣告を書き記す者。
彼らは乏しい者の訴えを引き受けず
我が民のうちの貧しい者の権利をはぎ
寡婦の資産を奪い、孤児のものをかすめる。
あなたがたは刑罰の日が来たなら
何をしようとするのか。
大風が遠くから来るとき
何をしようとするのか。
あなた方は逃れていって
だれに助けを求めようとするのか
また、どこにあなたがたの富を残そうとするのか。 (イザヤ書 10 章 1 ～ 3 節)

預言者の説教は、トラーの中での申命記に表現されていたものを引用している。申命記はヨシュ

ア王の宗教改革で決定的な役割を果たしたものであるが、権利的に弱い立場にある人々を擁護するものが記されている。

また、律法の手紙レビ記も弱者救済の律法が記されている。例えば、以下の「ヨベルの年」の律法はその代表である。

＜ヨベルの年＞

七年ごとに繰り返される許しの年に、負債を免除して債務奴隷を解放する規則が記されている。許しの年、すなわち安息の年を七度経た後の五十年目の年は、「ヨベルの年」として祝うことになる。それまでに売買されていた土地財産は元の所有者や遺産相続人に戻される決まりがあった。

(レビ記 25 章)

しかし、実際にはこのことが実行されないことを、預言者エレミヤは非難している。土地の再分配は神こそが本来の所有者であるというユダヤ教の教えに基づいている。

地は私のものだからである。あなたがたは私と共にいる寄留者、また旅人である。

(レビ記 25 章 23 節)」

ユダヤ教の律法は、古代の社会改革の弱者救済の課題を制度化したものである。ただし、このことが実際に実行されていたかが、問われている。預言者たちが社会的不正について糾弾する理由になっている。

この「ヨベルの年」は、のちにイスラエル救済のシンボルとして、再解釈されている。すなわち、長い期間民族独自の土地を持たなかったイスラエル民族が、第二次大戦後に約束の地を得たことに、この律法の効力を知ることや、さらに世界終末時に「神の国」の実現の際のイスラエル民族の救済への期待が、この律法の実現と考えられている。^(注4)

＜落ち穂ひろい＞

収穫に際しては、穀物を刈り取ることを禁じ、貧しい者や寄留者のために残しておくことを律法で規定している。それは古代農村社会で貧者を擁護する習慣であった。土地も穀物も神のものであり、恵まれない者を助け合う互助の制度であった。

穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。…これらは貧しい者や寄留者のために残しておきなさい。

(レビ記 19 章 9 ～ 10 節)

畑で穀物を刈り入れるとき、一束畑に忘れても、取りに戻ってはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。（申命記 24 章 19 節）

ルツ記には、未亡人となったルツが義母のナオミを養うために、遠縁のボアズの畑で落ち穂拾いをする場面がある。ボアズと異邦人のルツが結ばれて、オベドを生んだ。オベドはエッサイの父、エッサイはダビデの父であり、イエス・キリストの系図に繋がる。

古代ユダヤ教の社会では、単なる貧者救済制度が作られたのではなく、すべてのものは神のものであり、その神から一時預かったものを神に返すという基本的な信仰に裏打ちされている。

旧約・ユダヤ教の時代には、社会的弱者救済の制度もあり、預言者も貧しい者をいたぶり、搾取する裕福層や支配者に対する糾弾の声を上げている。だが、一方で伝統的に富を良きものとして評価する一面もある。真面目な労働から得られる対価は、神の恵みとして祝福されたものであり、安心な人生を保証するものであると言う。一方で負い目のある貧困や物乞いは、忌みきらいものであった。

主に従う人を飢えさせられることはない。

逆らう者の欲望は退けられる。

手のひらに欺きがあれば、貧乏になる。

勤勉な人の手は富をもたらす。（箴言 10 章 3～4 節）

実の兄弟も皆、貧しい者を憎む。

友だちならなお、彼を遠ざかる。

彼らは言っていることを実行しない。（箴言 19 章 7 節）

貧しい者とは、神に従わないことへの裁きとして貧困が与えられる。貧しい者が身内でも社会の中にあっても憎まれるのは、神の律法を守らない故であり、彼らの罪が貧しさの対価であるという。ユダヤ教の社会では、神の律法を遵守するか否かが社会的価値のすべてであり、貧しさやその原因となっている病気や障害、自然災害である飢饉でさえも、神の裁きとして受け取られたのである。

貧しい者を庇護する神学的根拠があると同時に、その貧しさに人間の罪を厳しく見るのが、ユダヤ人社会であった。貧困は神の呪いであった。

貧しい者を直接賞賛している箇所を、ユダヤ教の文献に求めることは出来ない。それが初めて見出せるのは、福音書の中である。すなわち、イエス・キリストの福音に登場する貧しき者の賞賛は、従来の律法遵守のユダヤ教からの大転換ということになる。

ユダヤ教では、不正な富を得るものに対する神の審判が宣告されている。

わざわざいなるかな、暴虐と不法を築き、欺瞞を土台にすえる者。彼らはあつという間に覆され、心の安まるときがない。（イザヤ書 48 章 22 節）

ラビ(ユダヤ教の祭司)の言葉に次のようなものがある。

この世は三つのものの上に立っている。律法と祭儀と慈愛あふれる行為の上に。^(注5)

ラビの立場では、病人の見舞い、他国人の投宿、喪服者の慰安などは、いわゆる慈愛の行為であり、組織だった「貧者の介護」とは別のものであり区別されていたという。ディアスポラ(離散のユダヤ人)にとって、ユダヤ人奴隷の買い戻しは、慈愛の行為の一つと見られていた。社会的苦痛を減らそうとする慈愛の行為は、社会の中で高く評価されていた。慈善(貧者の救済)と慈愛の行為は、律法と同様に重んじられていた。

このようなユダヤ教社会では、古代では他に例のないような貧者救済の組織だっで行われていたと考えられる。やがてヘレニズム文化の台頭の中で、ギリシャ哲学とユダヤ教の慈善行為が重なり合うものが出てくる。それは同時に、イエス・キリストの福音とも繋がりを感じさせるものである。ストア哲学とキリスト教の「富と貧困」についての考察は、次の財産についてのイエスの教えの中で触れることにする。

Ⅲ. 財産についてのイエスの教え

イエスは、来るべき神の国を知らせ、それをもたらす人として聖書に書かれている。神の国は既に始まっていて、イエスの活動の中にそれは実現している。そのことは、イエスがこの世の富や財産をどう考えているかを知る基本的な者となっている。

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。(マタイ伝 6 章 33 節)

どの僕でも、二人の主人に兼ね仕えることはできない。…あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。(ルカ伝 16 章 13 節)

ここで使われている「富」は、アラム語で「マンモン」と表現されるものであるが、原義は「人間に信頼されるもの」の意であり、それが富や金銭を意味するようになったとされている。やがてキリスト教の時代になって、不正な富を表す言葉となり、貪欲を指す意味に使われるようになった。

イエスの教えの中に、「不正なマンモン」に対する強い警告が見られるのは、そもそも私有財産がそれ自体不正であるとの理解があるからである。原始キリスト教団の文書の中で、この「マンモン」

を敢えて翻訳せずにしていたのは、一種の偶像礼拝であると考えられたからである。偶像礼拝はその名さえ忌みきらうものだからである。それは人間に取り憑き、神の国の到来を拒むものだからである。この世のものにしがみつき、手放すことの出来ない魔力を持ったものが「マンモン」であり、神にすべてを委ねる信仰をないがしろにするものと考えられたからである。

イエスに先立つ旧約の預言者の言葉にも、富める者ではなく貧しき者が福音宣教の対象になっていることが明らかに示されている。

主はわたしに油を注ぎ、
主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして
貧しい人により知らせを伝えるために。
打ち砕かれた心を包み、
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。 （イザヤ書 61 章 1 ～ 2 節）

ルカによる福音書では、「貧しい人々は福音を聞かされている」のであり、とりわけ山上の垂訓では「富める者」との比較のうちにより鮮明に記されている。

貧しい人々は、幸いである。
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである。
あなたがたは満たされる。
今泣いている人々は、幸いである。
あなたがたは笑うようになる。・・・
しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。
あなたがたはもう慰めを受けている。
今満腹している人々、あなたがたは、不幸である。
あなたがたは飢えるようになる。
今笑っている人々は、不幸である。
あなたがたは悲しみ泣くようになる。
すべて人にほめられるとき、あなた方は不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである。 （ルカ伝 6 章 20 ～ 26 節）

貧しい者への「幸い」と、富んだ者への「不幸」とは、表裏の関係である。この貧しい者への祝

福と富める者への呪いは、神が与え、神が取られること、すなわち、今日の前で起こっている出来事は、神の業によって一瞬に変わることがあり、それを可能とする神への絶対的信頼を前提としている。

イエス自身富とは無関係であり、「人の子には枕するところがない」ことを自認し、彼に従う弟子たちにも、家族との別離、所有の放棄、そして弟子を遣わすときの貧困さ(所有物を持たないこと)を要求する。そして、次のように語る。

あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、だれにでも与えなさい。あなたも持ち物を奪う者からは取り返そうとしてはならない。(ルカ伝 6 章 29 ～ 30 節)

これは「汝の敵を愛しなさい」という、イエスの教えの黄金律である。後の世の禁欲主義者ヒエロニスムでさえ、その教説はあまりに過酷であり、困難であると語っている。だが、この究極の教えには、神が汝を愛するという前提がある。生きたもう神が臨在されているのに、財産に拘泥するいわれはない。これがイエスの神に対する信仰である。

さて、イエス自身は父親と同様に大工(建築職人)を職業として生きていた人であり、いわゆる日雇い労働者や土地のない小作人という貧民層の出身ではない。従って、財産所有について厳格な禁欲主義ではなかったと考えられる。

では何がイエスを私的財産から自由な境地に導いたのか。従来の「財産は神からの預かり物」という従来の考えではない。それは「神の国の到来」という思想からくるものである。神の国が到来するするという臨場的な現実感が、そのことを可能にしている。神の国がまもなく到来するのに、財産所有に心を迷わせることなどない。

後のキリスト教倫理では、貧しい者への施しがキリスト信徒の義務とされるようになるが、それはこの世を生きる者の倫理思想であり、神の国の到来を待ち望む者の信仰とは異なっている。「今、神の国が来る」という臨場感、そして神がこの場にいたもうという峻厳が、イエスから私的財産についての関心の低さを生んでいる。

キリスト教の私的財産についての教説は、単なるキリスト教倫理ではない。

<キリスト教とストア哲学の「富」の理解>

ストア哲学はヘレニズム哲学の一学派であり、紀元前三世紀初めにゼノンによって提唱されたものである。ストア哲学は、宇宙論的決定論と人間の自由意志との関係を問い、自然と一致することが道徳的であると説き、哲学論議よりも生活の行動内容が重要であると考えられた。

ここではストア哲学者の創始者のゼノンを中心に、彼の説く道徳律や富についての考え方を宣

べる。何故なら、ゼノンは倫理学に最も強い関心を示し、よりよく生きることの本質を求めたからである。ゼノンは、物の価値、人間の本質、世界における位置についての正しい認識を持つことなしに、幸福にはならないと説いた。また、知と徳との合一を賢者の理想とし、それが自然に適った生活であり、理想の生活と考えた。

賢者は克己によって自らの運命の主人であり、苦悩のうちにも、死に際しても常に不動であり、幸福である。徳の持つ自然性の故に、富や名誉、快樂や健康そのものを否定することはしない。それらは根本的に賢者にとってどうでもよいことであるからである。むしろ人間の自然の生活にとって有用な物とそうでないものを分け、欲するに値しない物を区別して、後者を斥けることが勧められた。

徳を自然法則への服従と理解することで、ストア派の道徳哲学は、「義務」の概念を導入し、あるものとあるべきものの区別する。それは道徳の規準に内面的に情操がに基づくものであった。このストア哲学は、やがてローマ法における「自然法」の思想に発展していくことになる。^(注6)

初代のキリスト信者にとって、このようなギリシャ哲学、中でもストア哲学は避けて通れないものであった。二世紀のクレメンス、オリゲネスなどはこのストア哲学を学んでいたことは明白である。ストア派の人たちは、すべての情念をいかに統御すべきかについて語っている。クレメンスは若い人々にキリスト教信者としての生活を確立させるために、ほとんどストア派の道徳哲学を引用していたとされる。

しかし、それと同時にギリシャ哲学、すなわち「異教の哲学」に対して、厳しい態度を取り、キリスト教とギリシャ哲学との安易な総合を考えていたわけではない。ストア派の道徳哲学が用いられたのは、あくまでこの世を生きる人間としての情念の統御の一点であった。キリスト教がローマの国教となる前の厳しい宗教弾圧の時代にあって、いかにして神に相応しい者となるかの哲学として位置づけられたのである。^(注7)

このようなストア哲学は、富、財産の所有について否定的な考え方はない。だが、賢者を理想とする生き方は、この世の価値のないものからの自由であり、不動心を持って生きることであるとされた。富や財産を捨てることが勧められたわけではない。不動心を持った賢者に近づけば、自ずとそれらに対する関心は低下すると考えられた。富に対する自由性は、人間の内面から、すなわち賢者になるという意志から生じるものである。

これに対して、イエスの教えは全く異なっている。イエスは人がよりよく生きる哲学を主張しているわけではない。「神の国が近づいている。悔い改めて福音を信ぜよ」がイエスの教えである。神の国へ入るのに、富や財産がどれだけ価値を持つのか、という教えがそこにある。

哲学の持つ人間的思惟と神学の持つ神の側からの思惟の違いである。イエスは人間のうちに

よりよきものが存在するのか、人間は己の情念を統御できるのかを問うている。

哲学の水平的思惟と神学の垂直的思惟の違いは明白である。

Ⅳ. ルカ神学における「貧しき者」の聖書的理解

1. ルカによる福音書の事例から

(1) メシア宣言(ルカ伝 4 章 18 ～ 19 節)

「主の霊が私の上におられる。貧しい人の上に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」

この記事の前には、イエスが伝道の開始を故郷から始めることを決意し、ガリラヤに入ったことが記されている。自身が育ったガリラヤのナザレの会堂に立ち、聖書を朗読して福音の説き証をした。その最初の言葉が、自身のメシア宣言である。イエス御自身が、古来ユダヤ教で待ち望まれたメシア(救い主)であることを、人々に告げる場面である。説教の冒頭で、神の国がどのようなものであるのかを指し示している。それは、貧者、囚人、目の不自由な者、圧迫された人々にとって、自由と解放を意味するものであった。「解放」とは、奴隷に対する七年ごとの解放(出エジプト記 21 章)を思い起こさせ、「ヨベルの年」への言及は、五十年ごとに訪れるあらゆる土地、家屋、借金、隷属関係からの解放を思い出させるものである。

ルカは、雄羊の角笛が高らかに鳴り渡ることによって始まる「ヨベルの年」を宣言することにより、メシアの到来がどのようなものであるのかを明らかにする。すべての負債の赦しと解放は、メシアによる罪の赦しとその喜びの象徴である。罪の赦しは神と人間との新たな関係への始まりである。その対象が、貧しい者、囚われている者、目の不自由な者、圧迫された者たちである。この世で苦しみの極みにいる者にこそ、神の国の入るのが相応しいと、ルカは記している。

この世の支配階級と呼ばれる者たち、政治家や裕福な者、祭司やファリサイ派、カドサイ派のような社会から尊敬を受け、自らもそのような者として己を誇る人たちは、神の国に相応しいものではないという。彼らは、自ら律法遵守に励み、その結果社会的評価や尊敬を一身に受ける人々であった。彼らではなく、その対極にある人々が選ばれたのは何故か。人間的な価値観や一般通念とは、全く逆転した考え方である。貧しい者たちに示される人々の中には、律法を守れない罪人や、今日のホームレスを指して言う「怠け者」たちも含まれていた。囚われ人や目の不自由な人の中には、自らの招いた失敗や不摂生を原因とする者もいるだろう。

私はかつて盲学校の校長をしていたときに、30代40代で糖尿病になって中途失明し、盲学校の門をくぐる人たちに対して、盲人の教員が「それなりの人生を送ってきた人たち」と、蔑んだ言い

方をしていたことを思い出す。自らは先天盲で生まれながらの視覚障害者であるが、彼らは摂生養生することなく、欲におぼれて病気になったことを揶揄した言葉であった。事実、入学面接した私は彼らの中に突っ張り気味な人のいたことを思い出す。

しかし、イエスは原因が何であれ、今困難の極みにいる人々こそ、福音の対象と見ている。正しい者が救われるのではない。むしろ、罪の中であえいで生きている者、自らの行いによって正しい者には決してなれない者、そして神の憐れみによってのみ生きられることを知っている者を、救いの対象としている。一方で、ファリサイ派のように、厳格に律法を守ることによって、神に救われるのは当然と考える人たちを厳しく非難している。自らの行いの正しさを功績として神の前に差し出すことの愚かさをイエスは指摘する。

福音の対象、そして神の国の住人として選ばれるのは、貧しい人に代表される「神の前に誇るべき何者も持たない人々」であることを告げている。この貧しさは、人として誇れる者を持たない者を意味している。無一物であると同時に神に差し出す者を持たない者、それがここでいう貧しい者の意味である。^(注8)

(2) 幸いと不幸の教え(ルカ伝 6 章 20 節)

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」

<貧しさと心の貧しさ>

ルカに示されるキリストの教えは、同じ共観福音書のマタイの八福の教えと比較される。対比をすればこうなる。

マタイ：心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。

ルカ：貧しい人々は幸いである。神の国はあなたがたのものである。

ルカでは、直裁に「貧しい人々」とあるのに対して、マタイは「心の貧しい人々」とある。この違いは何であろうか。ルカはこの後に、「今飢えている人々」、「今泣いている人々」と続いている。一方マタイでは、「悲しむ人々」、「義に飢え渴く人々」となっている。

同じ共観福音書でも、このような差異が出てくるのはなぜなのか。福音書は、マタイ、マルコ、ルカによる共観福音書と、ヨハネによる福音書がある。特に、共観福音書にはイエスの言動が記されていて、それぞれが重なり合う部分がある。しかし、全く同一ではない。それは書かれた時代とその背景、また著者の受けた教育や思想などによって、その違いが生じてくる。では、マタイとルカではどう違うのか。

マタイによる福音書の作成時期は、およそ 85 年頃とされている。著者はイエスの召命を受けた 12 使徒のマタイとされているが確かではない。キリストの十字架の死と復活、昇天の後、マタイは

50 年後に福音書を著したとされる。事実であれば、かなりの高齢者になっていたと考えられ、そのためマタイと名乗った別人ではないかという説もある。

一方、ルカによる福音書の作成時期はおよそ 60 年頃とされ、パウロの伝道旅行に従った医師でギリシャ人のルカであるとされている。

この両福音書の作成時期と著者によって、福音書の記述内容に相違が生じている。マタイは当時のユダヤ人の置かれた政治的状況を見て、初代キリスト教会の存続を図るために、ローマ帝国への抵抗の姿勢を見せていない。それが、「心の貧しき者」の表現を生んだのではないか。

ローマ帝国五代目皇帝ネロは、ローマの大火の犯人をキリスト信徒と見なし、大迫害が起こった。紀元 64 年のことである。使徒パウロはこのときに殉教したと言われている。さらに、66～70 年にかけて、第一次ユダヤ戦争が勃発し、独立を求めたユダヤ人が、ローマ帝国を相手に戦争を起こした。70 年にはエルサレムが陥落し、以後何回かの反乱は起こるが、ユダヤはローマ帝国の植民地として圧政に耐えるしかなかった。

この二つの事件をマタイは見聞きしていたはずである。世界最強のローマ帝国への反逆は、国家や民族の滅亡を招くだけと知り、福音書を書くに当たって親ローマ的にならざるをえなかった。キリスト教はローマ帝国に反逆する宗教団体でないことを明確にする必要があったからである。そしてそれは反ユダヤ的になるという結果を生じた。

イエスの処刑は十字架刑であり、これはローマ帝国の処刑であり、イエスはローマ帝国への反逆罪として処刑された。にもかかわらず、イエスを処刑に追いやったのはユダヤ人であると、聖書には記述している。

ピラトは、「一体どんな悪事を働いたのか」と言ったが、群衆はますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトはそれ以上言っても無駄なばかりか、かえって暴動が起こりそうなを見て、水を持ってこさせ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。（マタイによる福音書 27 章 24～26 節）

このようにマタイには親ローマ的であると同時に、「反ユダヤ的」な色彩が強い。彼のユダヤ人に対する視点が、ユダヤ人に対する一般的な偏見を培ってきたのではないかという説もある。

いずれにせよ、マタイはユダヤ人の置かれている状況の中で、反ローマではないことを全面に打ち出すことが求められていると考えた。「貧しい者」のままでは、国家に対する革命や反逆の輩という印象を与えかねない。そこで、「心の貧しい者」の表現になったのではないか。キリスト教信仰を、内面的精神的なものに押しとどめる意図があったのではないか。

また、聖書の文章を校正する場合、削除より付加の方が一般的である。イエスが語ったことの

一部を削除することは、その真意が問われかねないが、付加であればより説明的で分かりやすいと考えられる。とするならば、イエスの語った言葉は、「貧しい者」であると思われる。

一方、ルカは自身はイエスの生涯を直接見聞きしたとは、どこにも記されていない。パウロの伝道旅行に付き従う中で、パウロの教説を注意深く聞き取って、まとめたのであろう。福音書の冒頭に、すべてを調べ上げて、事実を順序だてて書き記したとある。

ルカによる福音書は、60年～63年頃に書かれたとされているが、ローマでパウロが迫害の中で殉教する直前ということになる。パウロの教説を忠実に文書にした直後に、パウロが死ぬことになる。殉教の可能性を脳裏において書き綴れたルカは、事実在即して描くという客観的記述を強い意識の中で書き上げたに違いない。

この点が、マタイの「心の貧しい者」ではなく、端的に「貧しい者」の表記になったものではないかと思う。

<「生活の貧しさと心の貧しさ」大塚久雄著>

経済学者大塚久雄の著書に「生活の貧しさと心の貧しさ」がある。大塚久雄は、内村鑑三の無教会主義キリスト教の弟子として知られている。東大総長を務めた南原繁、矢内原忠雄、そして大塚久雄は、内村門下で最も著名な人たちである。

大塚の著した「生活の貧しさと心の貧しさ」の中で、ルカ福音書にある「貧しき者」とマタイ福音書の「心の貧しき者」を対比させた文が掲載されている。大塚は専門が経済学であり、マックス・ウェーバーの研究者として知られ、「大塚史学」と呼ばれる戦後の社会科学に一時的ではあるが、大きな影響を与えた人物である。

この本は、彼の経済学・歴史学の見地から述べたものである。彼自身は、本書の後半で述べているように、キリスト教神学については、「中学生レベル」とであると認め、神学的な問題提起をしているわけではないと語っている。彼の先輩の南原や矢内原のように、キリスト教倫理観の基づく預言者の主張とは異なり、主張の対象を国民とキリスト者の間で曖昧化する中で社会批判をすることが、不明確なものにならざるを得ないものとなる。この点が、二人の先輩たちの主張や立つ位置が異なっている。二人の先輩は、その預言者の主張により、大学を追われたり政府から睨まれることにもなったが、大塚は後の大学紛争時の体制擁護派であったことに強い批判を受けるに至った人物である。

この本に記されているのは、そのような彼の立つ位置が明確に表されている。

経済的貧困という重要問題は、何らかの形であらかじめ解決されているのでなければ、経済的貧困も解決のめどが見いだされないという両者の関係にある。…経済的貧困の奥底には、意識されているとしないにかかわらず、精神的貧困が横たわっている。^(注9)

大塚は、心の貧しさを「精神的飢餓感」と呼び、聖書に登場する「徴税人ザアカイ(ルカ伝 19 章)」や「罪の女(ルカ伝 7 章)」を例に引いて、決して貧しい者ではないが、その職業によって人々から差別・偏見を受けていたものであり、自分が生きていることの意味を見出せない人たちであり、その中には障害者や病人も含まれると言う。彼らは人間扱いされず、不名誉な立場に置かれる人々であった。そして、心の貧しさを端的に表すものとして、自分自身の罪の意識にさいなまれるもの、それは内面に暗黒の闇を抱える人々のことであると主張する。その具体例が、上記の「ザアカイ」であり、「罪の女」である。

名誉感の喪失や社会的排除の中で心に闇を抱くものを、大塚は「心の貧しき者」と規定する。今日的表現で言えば、「自尊心」や「自己肯定感」と呼ばれるものである。イエスはこの「心の貧しさ」に焦点を当て、単純な「貧しさ」よりもっと重要なものとしていると解釈した。

この大塚の解釈には、出版された当時から多くの批判があった。その第一は、聖書神学的に、イエスが「貧しい者」と「心の貧しい者」のどちらを本当に語ったかである。聖書神学的には、後世になって、始めに語った言葉を削除する可能性と、出来上がった文言に付加する可能性の確率を考えた場合に、後世の初代キリスト教会が、自分たちの神学的なそして政治的状况の中で付加した可能性が圧倒的に高い。すなわち、イエス自身、現に目の前にいる貧しい人々を描いて語っていると考えるのが自然である。イエスは、社会的偏見や差別の中で排除されている人々を、福音の対象としているのであって、「心の闇」を抱えている人々を特に注目して、神の国の福音を説いたわけではない。

二点目は、ルカは医師でありギリシャ人であったことから、目の前の事柄を極めて客観的に見聞きして記したと考えられる。今日食べる物のない飢えた人々、今癒やされたい病人や障害者、今解決されたい問題に直面している人々を対象にしている。

そのようなことから、「心の貧しさ」や「精神的貧困」に焦点化して浮き彫りにすることが、的外れであると言わなければならない。ルカは、今飢えている人を対象にして、イエスは語っているという。

宗教とはかく現実生きることから離れて、「精神主義」や「心の持ち方」の論議になる傾向があるあるが、生きている現実の場から聖書を読み取ることがどれだけ大切なのかを思う。

大塚は一時的ではあるが日本を代表する経済学者であった。だが、第二次大戦への反省が曖昧だったことやナチスへの親近感から、多くの批判を受けた。特に、全共闘時代には、体制擁護派に回ったことや、経済学者ではあるが、真実の貧困問題の接点にいたのではなく、評論家的態度であることなどによって、多くの批判を受け、戦後はほとんど忘れ去られた学者となった。時代に強い影響を与えるキリスト者として、南原や矢内原と共に高い評価を受けたが、二人と異なって信仰と学問、信仰生活と社会生活の境界を明確にし得なかったこと、キリスト者としての鮮明な主張がほとんどなかったことが、曖昧さを招いた原因ではないか。

(3) やもめの献金 (ルカ伝 21 章 1～4 節)

「イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言うておくがこの貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

新約聖書に登場する女性の中に、真実の信仰を持って生きた女性が多く描かれている。その中でも無名のこの女性は、ひととき読者の心を捉えてやまない。それは、神を信じて生きるとはどう生きることかを、端的に見せてくれるからである。

物語の冒頭に、「イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた」とある。賽銭箱が少し高い位置にあったのであろう。たくさんの人々がそれぞれの分に応じて献金する中で、金持ちたちが献金する場面に遭遇したのであろう。次に登場するのは「貧しいやもめ」である。金持ちは富と豊かさの象徴であるが、その対義語が、「貧しい」である。「ある貧しいやもめ」の「ある」とは不定代名詞を用いて、名前も分からない女の意味である。明らかに名のあつ金持ちと貧しい取るに足らない女との対比が個々でなされている。彼女が「レプトン銅貨二枚」を賽銭箱に入れるのを、イエスは見ている。

「レプトン銅貨二枚」の価値は、「レプトン」はデナリオンの 128 分の 1 であり、一デナリオンが当時の労働者の一日分の報酬であることから、一日分の労働の対価の 64 分の 1 ということになる。一食分にすらならない金額である。しかし、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れたと、イエスは賞賛する。何故か。金持ちたちは有り余る中から入れたが、彼女は乏しい中からすべての生活費をすべて入れたからであるという。

この聖書の前の箇所には、祭司、律法学者、ファリサイ派、カドサイ派という当時のユダヤ教のエリートたちとの論争があり、彼らを強く批判する場面がある。ユダヤ教のエリートたちは、律法を深く学び、律法の遵守にかけて誰からも非難されるところか、社会的に高い評価と尊敬を受ける人々である。また、彼らの地位は生活の保障ともなっていて、豊かな階層に属していた。宗教的・知的にエリートは、この世的にも持てる者であり、裕福な生活を送っていた。その彼らをイエスは批判する。その背景には次のことがある。

第一は、「神と富に兼ね仕えることはできない」ということである。富とは、文字通りの財産であり、同時に高い社会的評価や民衆の尊敬を指している。神に仕えることは、そのようなものに心奪われることではない。むしろ、富を積むことが神に対する傲慢を生むという結果を招くことになるからだと、イエスは言う。

第二に、人の上に立つ人は「仕えられる者ではなく仕える者になりなさい」という言葉である。最後の晩餐の記事の後に、12 使徒たちの中で論争が起こり、誰が一番偉い者なのか議論された。イエスは、この世では王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれているが、

そうであってはならない。一番偉い人は仕えるものになりなさい。食事の席では席に着く人と給仕をする人がいるが、イエス自身がいわば弟子たちの中で給仕をする側にあったように、あなたがたも仕える者になりなさい、と説いている。自らを僕として人に仕えて生きることの勧めである。

神を愛することは、この世の富を求めないどころか、人に仕えて生きる者になれという。

このような教えは、この世にエリート然として生きる当時の支配階級の人々への強い糾弾となっていた。この糾弾が後に、イエスを十字架に送るという憎悪を醸成していったのである。

金持ちを始めとする支配階級の人々と「レプトン銅貨二枚」の女との対比をイエスは行う。これからの生活のこと、貧しさの極みで心を悩ます様々な思い煩いを、彼女は一顧だにせず、全財産を神に献げたこの女こそ、真の信仰者としてイエスは認めたのである。

この女がその後どうなったのか、どんな生活が待っていたのかについては、聖書は何も触れない。「神にすべてを献げた」その一点だけが、金持ちとの対比で記されている。^(注10)

イエスの教えた「主の祈り」の中に、「日ごとの糧を与えたまえ」という祈りがある。

今日の糧を今日頂くという意味である。それは、私たち人間は日ごとに神によって与えられ守られていることを表す祈りである。一週間分の糧を、一年分の糧、一生分の糧を与えたまえとは祈らない。今日の、今のパンを与えたまえと祈る。

出エジプト記は、奴隷状態にあったユダヤ人を神が憐れみ、モーセをリーダーとしてエジプトから脱出して、約束の地に向かう物語として知られている。ユダヤ人は砂漠の荒れ野を四十年間彷徨ったあげく、約束の地カナンに到着する。その四十年間、不平を漏らし、神に逆らう民を前に、神は守り続けた。その一つに、「マナ」の記事がある。

荒野では十分な食糧も手に入らず、これならエジプトにいて殺された方がましだと言う民に、天からパンを降らせた記事がある。それは一回分の食糧であり、次の日の分を残すことを禁じた。文字通り、日々の糧である。神がいて養いたもう。今日もまた次の日も。信仰とは日ごとの神に対する信頼である。「神守りたもう」の信仰が揺らげば、何日分もの「マナ」を取ることになる。神はそれを禁じた。

この出エジプト記の物語は、神によって守られて生きる信仰のあり方を示している。同時に、貧しいレプトン銅貨二枚の女は、そのことによって神を信ずる者の生き方を示している。この女の信仰は、聖書全体の使信を真っ正面から貫き、信仰者の生き方を明確にしている。聖書が読まれるときに、彼女の信仰に心振るわせて聞き入ることになる記事である。

女は神への信頼のゆえに「マンモン」から解放され、この世の思い煩いを捨て去っている。貧しさは、神への献身の証として示されている。^(注11)

(4) 金持ちと貧しきラザロ (ルカ伝 16 章 19 ～ 26 節)

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物

で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやってきては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴会にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴会でアブラハムのすぐそばにいるラザロが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父、アブラハムよ、私を憐れんでください。ラザロをよこして、指先に水を浸し、私の舌を冷やさせてください。私はこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、私たちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこから私たちの方に越えてくることは出来ない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。私の父親の家にラザロを遣わしてください。私には兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることがないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし死んだ者の中からだれかが兄弟の所に行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないなら、たとえ死者の中から生き返るものがあったとしても、その言うことを聞き入れはしないであろう。』」

贅沢な衣服を着て遊び暮らしている金持ちの男。貧しさの極みで人からの施しによってかろうじて生きているラザロ。この二人の対比の物語は、やがて二人とも死んで天に召されるが、ラザロは天使によって宴会の席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれる。アブラハムはユダヤ人にとっては信仰の父、民族の父である。一方、金持ちの男は死の世界で苦しむという展開になる。日本の古来の地獄、天国の絵物語に匹敵する話である。

ラザロはこの金持ちの門前に横たわっていた。「横たわる」の原語「バロー」は「投げられた」である。つまり、自分の力では身体をどこにも動かすことのできない障害や病気の人であった。人々が憐れんで金持ちの家の前であれば、運良く食べ物をもたらえるかもしれないと、彼を連れてきたのである。

金持ちとラザロの間にはとてつもない隔たりがあり、ラザロは願いや悲しみを訴えていたが、金持ちはそれに気づくこともなかった。もちろん、ラザロが家の前にいることは知っていただろう。しかし、彼の意識にはラザロの存在は全くなかったのである。

この金持ちは、ラザロと出会ったにもかかわらず、いつもそばを通り過ぎる。一顧だにせずに。有り余るほどのものを持ち、この世の成功者として誇り高い生涯を送り、多くの人の賞賛を浴びながら生きてきた金持ちの男。彼には自分には欠けるものなどないと思って生きてきた。そのこと自体、神を必要としない者の生き方であるが、さらにラザロと出会っても、彼に対する憐れみを全く持つことなく過ごしてきた。それこそが、「隣人愛」の教えから離れていることを示している。「隣人愛」は、

イエスの教えではなく、ユダヤ教の根本の律法である。「神を愛することと隣人を愛すること」が、ユダヤの律法の中核である。その律法を守ることのなかった金持ちは、ラザロと出会い、それは隣人愛への誘いの扉であったにもかかわらず、そこを乗り越してしまう。金持ちとは誰なのか。よくよく考えてみると、それは実に見るべきものを避けて通る「愛なき者」、すなわち「私自身」ではないのか、に行き着く。

一方のラザロ。このラザロとは一体誰なのか。ラザロは何もかもが上手いかず、人の施しで生きる者である。我々はラザロを気に入らない。彼は己の失敗の人生を、困窮しているものを次々と私たちにさせるからである。ラザロの困窮は、すなわち私自身の困窮を曝きだしているのではないか。ラザロとは見方を変えれば、私自身を示している。

ラザロの名前は、「エルアザル」。「神が助けられる」の意である。ラザロとは、「神の助けなしには生きられない者」を示している。それは、すなわち、私自身のことではないか。人に誇るべき何者をも持たないもの、自らで満ち足りているものではない者、神の憐れみのもとでしか生きられない者、それはまさに私自身ではないのか。

ラザロの物語は、人は神に満たされなければ、自らで満たして生きることを欲するが、それは神への反逆であることを教えている。ラザロの貧しさは、神によってしか満たされない者を示している。

宗教改革者ルターの膨大な著書の最後に記した言葉「我々は物乞いである。これは真実だ」の言葉を思い出す。自分では何もできない者、神の恵みを受けるしかない者。それはラザロによって映し出される私の姿ではないのか。貧しい者とは、私自身を指している。^(注12)

2. 使徒言行録の事例から

(1) 信者の生活 (使徒言行録 4 章 32 ～ 36)

「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売って代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ、一「慰めの子」という意味一と呼ばれていたキプロス生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持ってきて使徒たちの足もとに置いた。」

礼拝と祈りを中心に置いた初代教会の信徒の理想的な一致が描かれている。「一つの心、一つの思い」は、集団の団結力がその精神性に表れている。この中でもとりわけ目を引くのは、信徒の財産共有についての記事である。初代キリスト教会は、自分たちの持ち物や財産を共有したことは、私有財産の保持のない社会、すなわち「原始共産制」であることを示している。この驚くべ

き「原始共産制」の出現は、その後徹底されることなく消滅していくのであるが、一時的にせよこのような制度の中で教会が成立していた事実は、キリスト教会のあり方を考える上で重要な事柄となる。

ただ、信徒の一人ひとりが財産を教会の管理者に差し出し、それを売って共同生活が営まれたという記述はない。あるのは、財産を持ち寄って、必要に応じて分配され、その結果、信者の中に貧しい人は一人もいなかったという。財産共有は、共同体として生きる互助制度の極みである。このような共同体が存在したこと自体が希望である。

後段に、「慰めの子」バルナバが登場する。レビ人のバルナバは、ユダヤ教の律法に精通し、後に使徒パウロに従って伝道旅行をすることになるが、この聖書の箇所では畑を売ってその代金を使徒たちに差し出したという。持ち物を教会に捧げるといふそのことが、「マンモン」の悪魔から解放され、神に向かって生きる人間とされていることを示している。初代教会は、献金を要求したのではない。信者は自発的にそれを差し出し、財産管理と生活困窮者の世話を教会全体で負ったのだ。この互助制度の確立が、神の前での平等の思想の原点となっている。

歴史的には、この原始共産制は様々な形で検証されてきた。実際に起こったことなのか、ルカが理想の姿を描いたものではないのか、など。

今日、聖書神学の検証の論点として確認できることは、次の三点である。

- ①ルカは初代教会の理想像を記述していて、必ずしもすべてが事実ではない。しかし、ルカが一つの思いでいることの具体例を、貧しい者と富める者とが一つであるという理想像を描いたということである。申命記にある神の約束として、もはや一人の貧しい者がいないという終末の姿を予見している。
- ②ギリシャ人ルカは、聖書以外にこの理想像の記述の手本となったものがあるのではないか。プラトンの理想国家、その理念のもとにつくられたピタゴラス教団など、ギリシャ哲学の影響がなかったか。古代社会に広く行き渡っていた「友のものは共なるもの」というアリストテレスの理念(ニコマコス倫理学)が念頭になかったか。
- ③以上のような推測は、ルカの財産共有の記事がこの箇所にしか登場しないこと、また、新約聖書の中には他に全く記述がないこと、特にエルサレム以外の初代キリスト教会には、その痕跡が見当たらない。

以上の三点は、この記述はルカの全くの創作でしかないのかという疑いも生じてくる。だが、多くの聖書学者はそうではないと断言している。何故なら、キリスト者の兄弟愛は必然的にお互いの愛に満ちた集団の中に表れるものであり、その具体例として認められるからである。さらに、エルサレムのキリスト者が育った土壌であるユダヤ教には、組織化された慈善活動があったからである。財産の共有は、上部からの命令、すなわち共生によってなされたものではない。すべて自発的な行いによるものである。

もう一点、エッセネ派のクムラン教団の戒律について触れておくことが必要だろう。紀元前2世紀から紀元1世紀にかけて存在したユダヤ教の集団であるが、俗世間から離れて自分たちの集

団だけで生きることを目的として、宗教的静寂の徹底を生きた人々である。この一派の共同体としてみられている「クムラン教団」は、紀元前2世紀から紀元68年まで、クムランの洞窟に住み、財産共有、共同の食事、清貧の生活を送ったと言われている。1947年死海北西岸で発見された「死海文書(写本)」によって、クムラン教団の存在が明らかにされた。彼らは律法を学び、厳格な戒律を守り、後の修道士のような集団生活を送った。紀元68年の第一次ユダヤ戦争のさなかに、四散したと考えられている。

このクムラン教団は、入団する人々に厳しい集団生活を提示して、個人の財産をすべて共同金庫に渡すことを強制した。それは、「真理に従って生きる者」は、すべての知識、能力、財産を一切差し出すことがその条件とされたからである。初代教会の財産の共有は、すべて自主的な行いによる者であり、強制はない。その点がクムラン教団との明確な違いである。

初代キリスト教会の原始共産制は、根源にイエスの弟子の召命の記事に現れている。12使徒として召命を受けた弟子たちは、いずれも持てるものを捨ててイエスに従ったとある。土地も船も、親兄弟さえ捨ててイエスに従った者たちである。その神に対する献身の思いが、私的財産の放棄を生じさせたのである。一方、12使徒の一人裏切りのユダは、イエスの集団の会計を担当していたとあり、イエスを支持する人々が彼らに献金をしていたことが窺える。また、イエスが弟子たちを伝道旅行に派遣する際には、持ち物を何一つ持たないで行くように命じたが、それは彼らへのもてなしと慈善が神によってなされたと信じたからである。

この初代教会の原始共産制は、何故一時の出来事で終わったのであろうか。イエスの宣教は「神の国の到来」が中心であり、それを信じた人々がこの世の財産に関心を持つことから離れたことが要因と考えられる。だが、イエスの死後(昇天)、神の国の到来は非常に近いと考えられていたものが、そうではないことが明らかになるにつれ、この原始共産制も徐々に消滅していったと考えられる。あるいは、初代キリスト教会は、イエスの宣教の使信によって、大量の貧しい人々が入信した結果、もともと貧しい階層の信徒たちは教会の維持に困難を来したこともその要因ではないか。教会の財政的な維持という世俗的な事柄に否応なく巻き込まれていく中で、理想の集団生活が変わっていったと見るべきではないだろうか。

いずれにせよ、初代キリスト教会における原始共産制は、終末が近いことを信じた信仰者が、私的財産よりも神の承認を選んだことの果実として歴史に記されるものであろう。^(注13)

後世、この原始共産制を巡っては、その出来事を肯定的に捉える人たちと、否定的に見る人たちに別れてくる。肯定派は、言わずと知れたマルクスであり、初代キリスト教会の理想像を実際の世界での実現を目指して、共産主義国家を夢見たのである。否定派は、ニーチェであり、キリスト教の貧しさへの共感を、「奴隷道徳」と見なし、それがやがてナチズムの根拠となっていった。紙面の都合と本来の趣旨とは異なるため、二人の哲学者については詳しくは論述しないが、このテーマは人生と社会のあり方をめぐる根本問題に現在もなっている。

最後に、ルカが述べる「貧しい人」は、初代キリスト教会の信者に向けられているものであり、そ

れはイエスの「貧しい者」、すなわち、「小さな者」と同じ意味で使われている。「小さな者」とは、子ども、病人、障害者、徴税人、罪人、異邦人などであり、この世の基準で差別されていた人々である。さらに、キリスト教会の「聖徒」も同じ意味を持っている。神によってこの世から選り分かれた者の意であり、イエスをメシアと信じる者を聖徒と称するが、この世では全く取るに足らない者が、神によって聖別された者になったことを意味している。

なお、聖書で記されている「分配」は、原語ではコイノニア(*κοινωνια*)が使用されている。今日では、「交わり」と訳されているが、本来は、「ものを分かち合う」意味で使われる言葉である。貧しい人々と物質的な共有することを意味する言葉である。原始共産制は初代キリスト教の神の国の到来を待ちつつ生きる群れの中で起こった出来事であるが、単なる人間的な交わりではなく、飢えている人々と共に生きることを指している。後世、コイノニアは極めて精神的な意味合いで用いられ、「霊の交わり」、「誠の兄弟姉妹関係」のように使用されてきた。豊かな社会の中で、本来の意味合いが希薄になる一例であるが、プーコス(乞食)を神が愛される文脈の中で捉えることを忘れると、単なるキリスト教博愛主義に陥ることになる。「心の貧しい者」への変質が、常に起こりうることを銘記しなければならない。

Ⅳ. まとめ

1. プーコス(貧しき者)の理解

ルカによる福音書4章の「メシア宣言」では、「貧しい人に福音を告げ知らせるために主が私を遣わされた」とある。ルカが描くメシアとは「貧しい人に福音を告げ知らせる方」である。イエスの第一義的使命の宣言である。イエスは多くを語っていて、どの部分でも重要なものであり、それらは差別化されない。だが、イエスとは何者なのかを、ルカは「貧しい人を選んで福音の対象にしているメシア」と位置づける。「貧しい人」こそが、福音対象の最も重要な論点である。

では、「貧しい人」とは誰のことか。そのような人を対象に福音を告げ知らせるとは何を意味するのか。これこそが、ルカにとって重要な問いとなっている。現代の私たちの「貧しい者」の理解は、本質的経済問題として浮上しているが、それとは全く異なっていると思われる。

ルカは、「貧しい者」のリストを上げている。「貧しい者(プーコス)」の単語で述べられている箇所では、常に「貧しい者」が先頭に置かれている。

貧しい人、目の見えない人、捕らわれている人、圧迫されている人(4章8節)

貧しい人、飢えている人、泣いている人、迫害されている人(6章12節)

貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人(14章13節)

貧しい人、できものだらけの人、飢えている人(16章20節)

ルカは日常評価されず、排除されている人々を念頭に、彼らを「貧しい者」という枠で括っている。聖書には、具体的内実によって示される貧しい者をリストに上げるが、同時に、富む者、近所の金持ちも記している。だが、ここでいう「貧しい者」は「富む者」との対比ではなく、力や特権に属している者と、彼らによって排除されている者との対比である。

従って、「貧しい者」への宣教は、排除され、辺境へと押しやられている者を、神は敢えて選び取ることを意味し、それは打ち捨てられた者の復権、失われた者の回復を意味している。^(注14)

そして何より決定的なことは、イエス自身が「貧しい者」となられたことである。イエスの貧しさは、福音書の至るところに記されている。

①「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」(ルカ 2 章 8 節)

救い主は、この世の権力者として生まれてきたのではない。最も貧しく苦しむ者のためにこの世に來られた。有名な讃美歌 107 番はバッハによる作曲であるが、その歌詞はこうなっている。「わびしき干し草、まぶねに散る、黄金のゆりかご、錦の産着ぞ、君にふさわしきを」と。

②「人の子には枕するところがない」(ルカ 9 章 58 節)

そのまま読めば、神の子にはこの世で安らかに眠る家はないことを示している。この世で家屋敷などの財産など持つことはない、と言われる。その主旨は苦難の道をたどる救い主の決意を、彼に従う弟子たちに伝えた言葉である。

③「財産のある者が神の国に入るのは何と難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(ルカ 18 章 24 節)

金持ちの青年がイエスに問うた。永遠の命を受け継ぐためには何が必要か、と。イエスは持ち物をすべて売り払い貧しい人々に分けてやりなさい。そして私に従いなさいというと、青年は非常に悲しんで立ち去ったとある。

ここには富(マンモン)は、悪魔になり得ることが示され、神の憐れみで生きる者は、貧しくなることが求められていると解釈される。イエス自身がマンモンから解放されていたのである。すなわち、貧しい者の一人に数えられていたのである。

「貧しい者」の対語は「富める者」であるが、貧しい者の背景には、「神への謙り」がある。一方の富は、「神への思い上がり」がある。ギリシャ語のヒュブリスは、傲慢と訳される。ギリシャ文化に登場するヒュブリスは、神々に対する不服従を意味するが、それがキリスト教に入り、イエスがエルサレムで受ける受難を、辱めを受ける(ヒュブリゼイン)の語を用いている。人間の傲慢さは神を無

視すること、人間が神の被造物であることを忘れること、それは神を傷つけることになり、従って神の罰を受けることになる。貧しい者は神の憐れみを受け、富のある者は傲慢のうちに神に反逆し、罰を被る。それがルカの「貧しい者」の理解である。

さて、貧しい者への福音は、今日的用語でいえば、「インクルージョン」である。社会的排除にある者が、包み込まれ支えられ、人間としての尊厳が復帰されることである。

「神の前での平等」は、長く語り続けられてきたが、本来は神の国の到来を待ち望む者、神の支配が間もなくやってくるという終末論の中でこそ、意味を持つものである。

プトーコス(乞食)は、この世で無一物であり、頼るべき者のない者の象徴である。このような者こそ、神の国に相応しいというルカの解釈を理解したい。

2. 現代における貧しき者

2000年前のイエスの時代の「貧しき者」、とりわけ「プトーコス」と、現在の貧しい者とを比較することは困難である。置かれている社会構造、とりわけ福祉政策などの近代的理念に基づく社会変革や、それを推進する社会理念のもとでつくられてきた社会のシステムが全く異なっているからである。

国際連合の発行する人間開発報告書には、「人間貧困指数」が表記されている。この中で、発達途上国の人間貧困指数と、特定OECD国の人間貧困指数が載っている。

発展途上国の人間貧困指数は、次の三点の指標から計算されている。

- ①長寿で健康な生活：40歳まで生存できない出生時確率
- ②知識：成人識字率
- ③人間らしい生活水準：改善された水資源を活用できない人の割合、年齢の割に低体重
子どもの割合、医療サービスを受けることの出来ない人の割合

特定OECD国の人間貧困指数の指標

- ①長寿で健康な生活：60歳まで生存できない出生時確率
- ②知識：機能的識字能力に欠ける成人の割合
- ③人間らしい生活水準：貧困ライン以下で暮らしている人の割合
- ④社会的疎外：長期失業者^(注15)

当然のことであるが、発展途上国の貧困率は高く、OECD加盟国は低い。現在の世界の重要課題として、貧困や格差の問題が危機的な状況にまで到達していると言われている。私は自身が関わる日本のホームレス問題と、ウガンダおよびバングラデシュの子ども支援の取組から、現在の貧困問題を考えてみたい。なお、ウガンダは世界貧困率86位、バングラデシュは60位(2016年)となっている。かつて、世界一の貧困国と言われたバングラデシュは経済開発が進んで、貧困

問題が軽減している。一方、特定OECD国の中で、日本は4位となっている。子どもの貧困率16%が示すように、日本は他国と比べて豊かな社会とされているが、紛れもなく貧困国に名を連ねている。

現代の貧しき者の典型はホームレスであるとする基準は、「衣食住に欠けた状態にある者」ということである。もちろん現在のホームレスは2000年前のブトコスと同じ状況ではない。そもそも、ホームレスの人たちは、「乞食」なのだろうか。また、彼ら自身にそのような意識があるのかも問われる。

現代の貧困は、社会全体が克服すべき課題であり、貧困を放置して置いて良いことはないと思う多くの人が考える。貧困は社会問題であり、個人の問題に特化することは間違いであるとする。それは近代国家だからである。だから、福祉制度があり、2003年に成立したホームレス自立支援法¹⁶が策定されている。死に至る貧困問題を社会全体で克服しようとする「福祉社会」や「福祉の精神」は、近代国家の原則であるからである。

しかし、そうは言っても現実には、餓死者が出ることも、孤独死で亡くなる高齢者もいることは事実である。しばしばニュースで知らされる餓死者の実態は、遠い未開の地や紛争中の国の出来事ではなく、豊かで物にあふれる日本社会に起こっていることが、人々に衝撃を与えるのだ。一様に福祉行政は何をしていたのか、町内の助け合いはどうなっていた、そのような批判が飛び交う。

現代の貧困の背景には、五種類の排除があるという。

第一は、親世代からの排除。十分な教育が受けられないこと。

第二は、企業福祉からの排除。雇用や福祉のネットから漏れること。

第三は、家族からの排除。家族の支援が受けられないこと。

第四は、公的福祉からの排除。安全弁であるはずの公的な福祉が受けられないこと。

第五は、自分自身からの排除。何のために生きるのかを見失っていること。^(注16)

貧困は排除の結果だとするならば、排除を克服する策があれば、それが可能になる。だが、事柄が単純でないのは、政治や行政のあり方を変えることが容易ではないことや、国民全体がそれを願っているかという社会意識の問題もある。

私は、「共生社会」の実現に向けて、様々な活動が続いているが、政治や行政が共生社会の実現に向き合うことが希薄であること、また、そもそも私たちが本当に共生社会を本当に求めているのかという疑問もある。共生社会はお互いが支え合うことを前提とするが、それには国民一人ひとりの税の負担への理解や意識変革が求められる。それが理屈は理解できても、それを押し上げる原動力にならない。社会全体の共通理解が薄く、政府もそれを本気には望まない現実があり、私は小さな市民レベルでの活動を繋げていくことが理解者の拡大に繋がって、やがて望ましい社会をつくることになるという道を模索している。

私は、川崎市南部にあるキリスト教会で、25年間にわたるホームレス支援を行ってきた。その中で知らされた、現在の貧困の問題について述べたい。

私は特にホームレスの人々の中でも、障害のあるホームレスに焦点を当てて考えてみたい。ホームレスの中に障害者が多く含まれていることは、支援活動を行う人たちには、早くから知られていた。支援者たちから約三割か四割の人に障害があると言われてきた。私は実際に25年間で千人以上のホームレスに関わり、その半数に障害があると理解している。それは私自身が障害児教育の専門家であり、特に「障害のアセスメント」を行う部門で長く勤務してきた経験によっている。

さらに、ホームレス障害者の多くは、「愛着障害」のある人々であることも確認している。捨て子であったり、てんかんがあつて家族から冷遇された人、知的障害があり兄弟の中でも疎まれて育った人、難聴があつて親兄弟から他人のように見られて育った人など、人の成長の根幹にあるべき愛情、信頼、心の開放を経験しないままに、社会に出ても適応力がないままに、ホームレスになった人々。この人たちの貧しさは、「関係性の貧困」や「仲間関係の貧困」、そして「人間としての尊厳の貧困」に尽きるのではないかと思う。「人間として認められたい」、「人の温もりの中を生きたい」、「人間仲間の中で生きたい」という思いを強く感じている。それこそが、ホームレスの貧困の中心にあるのではないか。^(注17)

教会では、毎週二日(木・日曜日)に食事や衣類、日用品を提供するが、最も大切なことは、彼らを仲間として遇すること、彼らの語る言葉や思いを受け止めること、私たちがあなたたちの仲間であることを知ってもらうことを願っている。懇談会では、ホームレスの一人ひとりが語る機会を設け、それを全員が聞いてその人を理解するようにしている。「人が語ること」とそれを聞いて受け入れる人の存在を前提としている。語る言葉を真剣に聞くことは、その人自身を受け入れ、仲間関係として生きることになるからである。

ホームレスは、飢え死に至る「ブトコス(乞食)」なのか。現在の日本社会では、特別な場合を除いて餓死者はほとんどいない。なぜなら、ホームレスへの援助政策があり、また私たち教会のような支援活動があるからである。また、豊かな日本では余剰食材が至るところに捨てられていて、コンビニの廃棄物などを食することも出来る。また、ホームレスの人々の多くは、何らかの仕事を持っている。缶拾い、町内の清掃活動、大型量販店での席取り、駅の売店の荷物運びなど、少ないながらも収入を得ることが出来ている。川崎市のホームレスの88%が何らかの仕事をしている調査結果もある。^(注18)

25年にわたるホームレス支援活動を通じて、日本という物質的に豊かな社会で生きる貧しい人々と多く関わってきたが、今の時代であれば、「愛の貧しさ」という言葉を痛感している。言い換えれば「人の温もりの貧しさ」である。人間関係がズタズタに分断され、排除の中を生きる「迷える羊たち」の最先端にホームレスがいるのではないか。ホームレスに至ることたちの背景には、愛着障害、家族の疎外、教育や福祉の個別のニーズへの対応が徹底されない不備の対応が見えてくる。その結果、人を信頼できず、仲間関係を作れず、孤独を生きる人たちの「愛の貧しさ」に焦点

を当てた支援が求められている。

教会らに来る人たちの中で、「仲間にして下さい」と叫ぶ人たちがいる。孤独に生きる人たちの魂の叫びである。食べ物や衣類も生活には必須なものではあるが、人の温もり、仲間関係を求めている。氣にかけてくれる人、話を聞いてくれる人を求めている。それはホームレスの人たちだけではない。家族から切り離され、職場にも学校にも居場所のない人たちが、仲間として生きることを求めている。現在の貧困は、「愛の貧しさ」と言えるのではないか。

私のいる教会では、NPO「ワールドビジョン」の展開する「貧困の国の子ども支援活動」に長く支援してきている。ウガンダの子ども、バングラデシュの子どもたちの支援を通じて、世界の貧困の実態を体験してきた。支援活動は、次のとおりである。

- ① 1994 年～ 2001 年 ウガンダの孤児施設（施設への献金）
- ② 2004 年～ 2009 年 バングラデシュの少年（貧困の子ども支援）
- ③ 2010 年～現在 バングラデシュの少年（貧困の子ども支援）

8 年間続いたウガンダの孤児施設への支援は、現地の指導員が教会を訪問したことから始まった。内乱とエイズによって孤児になった施設運営のために、教会は献金を続けてきた。ウガンダの子どもたちと教会学校の子どもたちとの文通が始まり、病気や貧困の中を生きる子どもたちとの交流が続いた。それは、「ウガンダに咲く花」という題の本になった。病気で亡くなる子どもの実態を、日本の子どもたちは知って驚き悲しんだ。^(注 19)

その交流は 8 年続いたが、ウガンダの政情不安の中で交流が途絶えてしまった。やがて、バングラデシュの一人の少年を支援する活動に移った。当時世界で最も貧しい国と言われたバングラデシュの子どもとの交流が始まったが、それは 6 年で幕を閉じた。10 歳の少年が支援の打ち切りを希望してきたのだ。今まで教会の支援で学校を続けることが出来たが、父親が病気になって自身が働かざるを得なくなり、学校を辞めると決意したという。6 年間の交流で初めて写真を送ってきたが、痩せていて小柄な体格の子が、一家を背負って生きることになる。しかも、学校を断念することは、今の貧しさから生涯抜け出せないことを意味する。その写真を見て、私たちが最も驚いたのは、彼が素足であったことである。地面の上に立っている彼の足に靴がない。私たちは、貧しいことの意味を心底理解した。これが貧しい国に生きる孤児者の実態なのだ。この実態を豊かな日本の子どもたちに知らせることが、教会の使命であると確信した。現在は新たな少年が紹介されて、支援が続いている。この子の教育が途切れないことを、私たちは祈り続けている。

「愛の貧しさ」の中を生きる日本の子どもたちが、自らの貧しさに留まることなく、他者の、他国の本当の貧しさを知ることこそ、教育の意味ではないか。

この論文では、ルカ神学における「貧しい者」の理解を巡って、様々な角度から検討をしてきた。「貧しい者は幸いである」という、この世の価値観の大転換が示される言葉には、神の国の支配に身を委ねる信仰が前提にある。信仰を理解しない者には、躓きの石となる。むしろ、マルクスやニーチェに共感を持つものが多いのだろう。

だが、宗教的共同体のユダヤが、古代の福祉や人権思想のない時代にあって、貧しい者たちの救済のシステムを講じていたことは、驚くべきことである。飢え死にさせない、追い詰めない制度は、その背景に同じ神を信じる同胞意識がある。荒れ野を40年間さまよい、約束の地に辿り着いたものの列強国の圧迫に悩まされ、国が崩壊する危機にも直面し、民族の統一性も危ぶまれるただ中であって、民族が団結できた唯一の理由が信仰における一致であった。今日の分断化、排除化、格差化の社会にあって、福祉や人権思想が大きく後退している現状を思うときに、ユダヤ民族が特別な存在であることを思わずにはいられない。神学者K. バルトいわく、「ユダヤ民族の存在が、神の存在証明である」という言葉は、あらゆる科学的実証的なものを乗り越えて、真実に迫るものである。

キューバ生まれの神学者フスト・ゴンザレスは、「キリスト教史」の中で、欧米のキリスト教は終焉の時代を迎えているという。富める国になった欧米では、自らを貧しい者とは理解せず、聖書の言葉が自分たちに語られたものではないと考える。加えて近代合理主義・実証主義の中にあっては、キリスト教を迷信として片付ける傾向が強い。

だが、一方でキリスト教が飛躍的に発展している国々がある。中南米、アフリカの南半球の人々であり、今、食するものに欠いた状況のただ中にいる者が、キリストの福音を真剣に聞いているという。北半球では急速に非キリスト教化している。キリスト教は虐げられたものの宗教であることは、豊かな支配者になった人々が捨て去る時代を迎えている。だが、貧しい者こそ救われるという人間本来の宗教観は、経済的価値観一色となった現代人の中にあっても、なお、否むしろ多くの人の心に留まるものではないか。その意味で聖書を聞く者の立つ位置が問われていることを前提に、貧しい者を自らのことと理解することの大切さを思う。^(注20)

〈注〉

- (1)「新約聖書ギリシャ語精解」バークレー著 日本基督教団出版局 1970 p.309
- (2)「イエスの現場」滝沢武人著 世界思想社 2006 p.34
- (3)「聖書」日本聖書協会 1989 p.1435 以下引用聖書は同書、ページ数省略
- (4)「古代教会における財産と富」M. ヘンゲル著 1989 p.38
- (5)「聖書外典・偽典」P. アボス著 1989 p.261
- (6)「古代・中世の哲学」速水敬二著 筑摩叢書 968 p.135
- (7)「ギリシャ哲学と宗教」J. フォーゲル著 筑摩叢書 1969 p.197
- (8)「説教黙想アレティア ルカによる福音書 日本基督教団出版局 2014 p.124
- (9)「生活の貧しさと心の貧しさ」大塚久雄著 みすず書房 1978 p.37
- (10)「説教黙想アレティア ルカによる福音書 日本基督教団出版局 2014 p.289
- (11)「N T D新約聖書注解 ルカによる福音書 K. レングストルフ著 N T D新約聖書 注解刊行会 1976 p.489
- (12)「説教黙想アレティア ルカによる福音書 日本基督教団出版局 2014 p.163
- (13)N T D「新約聖書注解 使徒行伝」G. シュテーターリン著 N T D新約聖書注解刊行 会 1977 年 p.159
- (14)「ルカ福音書の神学」J. グリーン著 新教出版社 2012 p.95
- (15)「Human Development Report 2007 Team」U N p.183
- (16)「反貧困」湯浅誠著 岩波 2008 年 p.60
- (17)「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社 2012 P.136
- (18)「日本におけるホームレスの実態」川上昌子著 学文社 2005 P.274
- (19)「ウガンダに咲く花」鈴木文治著 コイノニア社 2009 p.76
- (20)「キリスト教史下」F. ゴンザレス著 新教出版社 2003 p.372